

第111回 日文研フォーラム



## 愛 玩

－ 安岡章太郎の「戦後」のはじまり

“AIGAN” Start of Yasuoka Shōtarō’s ‘After War’



アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ

Ahmed M. F. MOSTAFA

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄





● テーマ ●

# 『愛 玩』

－ 安岡章太郎の「戦後」のはじまり

“AIGAN” Start of Yasuoka Shōtarō’s ‘After War’

● 発表者 ●

アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ

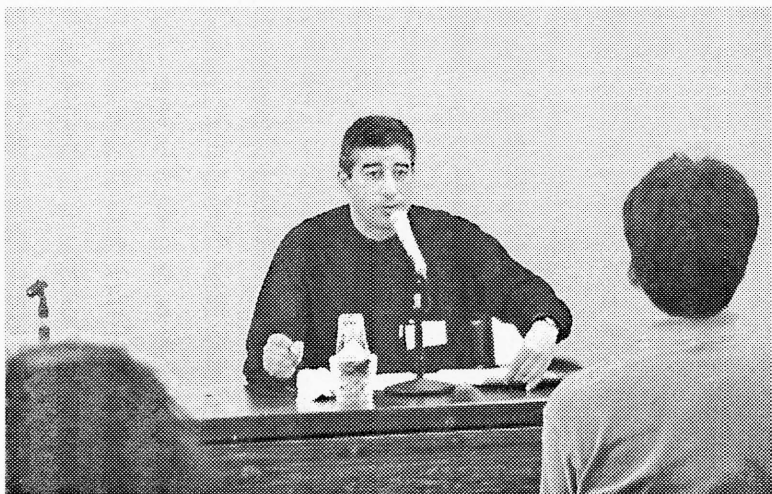
Ahmed M. F. MOSTAFA

カイロ大学講師

Lecturer, Cairo University

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1998年10月6日（火）

### 発表者紹介

アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ

Ahmed M. F. MOSTAFA

カイロ大学講師

Lecturer, Cairo University

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

### 学歴

- 1978年 7月 カイロ大学文学部日本語日本文学科卒
- 1982年 3月 大阪外国語大学日本語科大学院卒・修士号
- 1987年 3月 中京大学文学部国文学研究科大学院後期卒
- 1992年 3月 同大学同学部・文学博士号

### 職歴

- 1978年10月 カイロ大学文学部日本語日本文学科助手任命
- 1983年10月 同大学同学部助講師昇格
- 1992年12月 同大学同学部専任講師昇格（現在に到る）
- 1998年 8月 国際日本文化研究センター客員助教授（1999年7月まで）

### 業績

- 1990年 6月 『弁慶物語』アラビア語訳出版（カイロ大学プレス・自費出版）
  - 1993年 5月 谷川俊太郎の『二十億光年の孤独』の紹介・一部アラビア語訳（エジプトの月刊文芸雑誌「イブダア（創造）」記載）
  - 1996年11月 安岡章太郎の『悪い仲間』のアラビア語訳発表（エジプトの週刊文芸新聞「アハバール・アルアダブ（文学情報）」に三回に分けて連載）
  - 1997年 5月 三島由紀夫の『潮騒』アラビア語訳の総合監督（エジプトの「ダール クスール アルサカーファ」出版社出版）
  - 1997年12月 安岡章太郎の『青葉しげれる』アラビア語訳発表（「アハバール・アルアダブ（文学情報）」に三回に分けて連載）
  - 1998年 3月 小論発表・『『肥った女』・戦時下に生きる都会の若者たち』（中京大学紀要「中京国文」に記載）
  - 1998年 7月・『大川周明』アラビア語訳発表（エジプトのアルアハラム新聞出版社・非売品）
- （現在、安岡章太郎作の『海辺の光景』・『宿題』・『肥った女』・『質屋の女房』のアラビア語訳が編集及び出版中）

## 序

### 「神話」が砕け散る虚しさ

「戦争」というテーマは安岡章太郎の少年時代及び成年時代そして父親がなくなるまでの壮年時代を題材にした作品の多くに、背景として取り上げられている。そしてそれらの作品を大まかにわけると、「戦中の時代を書いたもの」と「戦後の時代を書いたもの」に二大別できるのではないかと思う。前者に該当する作品は、『宿題』（一九五二年発表・「文学界」）『悪い仲間』（一九五三年発表・「群像」）『蒸し暑い朝』（一九六一年発表・「中央公論」）『遁走』（一九五六年発表・「群像」）『相も変わらず』（一九五九年発表・「新潮」）『肥った女』『青葉しげれる』（一九五八年発表・「中央公論」）『サアカスの馬』（一九五五年発表・「新潮」）『質屋の女房』（一九六〇年発表・「文芸春秋」）などであり、後者を代表する作品は、『陰気な愉しみ』（一九五六年発表・「文学界」）『ハウスガード』（一九五三年発表・「時事新報」）『ガラスの靴』（一九五一年発表・「三田文学」）『ジンゲルベル』（一九五一年発表・「三田文学」）『雨』（一九五九年発表・「文学界」）『サアヴィス大隊要因』（一九五四年発表・「新潮」）『海辺の光景』（一九五九年発表・「群像」）『軍歌』（一九六

二年発表・「新潮」『家族団欒図』（一九六一年発表・「新潮」）『愛玩』（一九五二年発表・「文学界」）などであると考え。後者の作品の中から、この論文では『愛玩』を取り上げ、安岡氏はいかにこの作品をもって自分の中の「戦後」をシンボリックに表現しようとしたかを探ってみたいと思う。

安岡章太郎の作品のほとんどは自分自身の自伝を題材にとり、それをほぼ忠実に語るものであり、誰の目から見ても、「私小説」的な要素に満ちているが、「私小説」という評価の枠内におさまるものではない。『愛玩』やその他の多くの作品にはその深い想いや主張がシンボリックな形で表現されている。私は他に安岡章太郎の二つの作品を分析し、その中に含まれると思われるアレゴリーを取り上げた。この二つの作品とは、『宿題』と『肥った女』である。『宿題』を取り上げたとき<sup>(1)</sup>、「父親の不在」というテーマに焦点をあてながら、特に戦争ドキュメンタリ映画上映の場面に出てくる数多くのアレゴリーを分析してみたり、また『肥った女』の論文<sup>(2)</sup>でも女郎の街が「幻想の世界」もしくは「非日常の世界」のシンボルとして象徴されたのではないかという読み方に立って論じた。同じように、『サアカスの馬』や『蛾』や『ガラスの靴』などの場合も、アレゴリーやシンボルが使われていると思われる。つまり、シンボルもしくはアレゴリーを使って「戦争」

に對する自分の心中を述べるのは安岡章太郎のそのころの複数の作品の共通点といえよう。

安岡章太郎はこれらの一連の作品を通して自分の胸の奥深くに秘められたある想いを伝えようとしている。そういう印象がすこぶる強い。そしてその内容は安岡章太郎の「戦争」に對する自分の複雑な想いに他ならないと考える。

安岡章太郎は学徒兵として戦争の緊迫した空気を味わい、敗戦の苦さも味わった。これは私自身が少年・青春時代を過ごした状況と、国と文化と歴史は異なるものの類似なる部分が多く、そのような経験から、「戦争」というものが安岡氏の文学世界においては如何にもとても大きなテーマであり、殆どの作品に奥深く根ざしているものでとても重みのあるものと充分認識した。

『愛玩』を四年ほど前にはじめて読んだとき、私は三十年ほど前の第三次中東戦争の「終戦」の日を思い出した。

そのとき自分は小学校五年生の十才だったが、その日の出来事は昨日のようにハッキリと覚えている。戦争が勃発して六日目のことだったが、その日の朝から夕方までラジオから流れてきた軍事声明の内容はたった一つで、「我がエジプト軍が攻防戦をあらためるため、シナイ半島からスエズ運河の西側へ撤退し防御線を

固めようとしている」というのであった。私を含めて家族やまわりの隣近所もマサカと違ってラジオに耳を当てながら固唾を吞んでいた状態。この戦争がはじまる前まで、新聞やラジオやテレビそして学校の先生もすべてが「ナセルや中東最強のエジプト軍の絶対勝利」の話を毎日のように何度聞かせてくれたことだろうか。私たち子供から大人までラジオから流れてくる軍歌と合わせて声を上げてどれほど歌ったことだろうか。しかしその六日目の夕方に、テレビの画面にナセル大統領が登場し緊急声明をしたことで、今までの「神話」が嘘のように一瞬にして砕け散ってしまったのであった。

当時四七才の若さのナセル大統領の顔は七十才の疲れきった老人の顔にみえた。敗北そして辞任の声明を発表する前に、すでに私はその顔を見ただけでその悲劇の真相を悟ってしまった。声明発表のときなぜかテレビ画面の調子が急に悪くなり、映像が斜めに歪んでしまった。親父が必死に幾ら調整のつまみをいじっても画面の映像は一向になおらない。これまで教祖様のように信じて愛しつづけてきたナセル大統領のあの歪んだ顔は、言い表せないほど私に大きな衝撃を与えてしまい、消えることのない深い悲しみを胸に植えつけられてしまったのであった。大統領の敗北・辞任声明が終わった瞬間、窓から暮れていくカイロの空を涙ぐん

だ眼で見上げると、その空は対空砲から打ち込まれ破裂した無数の砲弾によって真っ赤に燃え盛っていた。私はその日からあらゆることに對して不信感をいだきはじめ、そしてそれが私にとっての「戦後」のはじまりであった。そのときからまたなぜか両親の仲が悪化してしまい、家の空気は熱っぽく重苦しくなってしまった。これも私にとっての「戦後」を一層耐えがたいものに作り上げてしまったのであった。

しかし不思議なことに、私を含めて殆どの当時のエジプト人は自国の敗北の悲劇をただ嘆き悲しむばかりでなく、いつかそれが一種の滑稽さに変わってしまい、エジプト軍の圧倒的な敗北は沢山の小話のネタになった。言い換えれば敗北の悲劇を乗り越えるために、皆はそれを自嘲的に扱い批評したり笑い飛ばしたりしたのである。そのとき自分は、悲劇の極限に達するとそれが皮肉や滑稽にさえ変わってしまふと思うようになった。『愛玩』を読んだとき、以上述べた思い出が三十年間という深い溝を一瞬に飛び越えて眼の裏に噴水のように吹き出してしまったような感じであった。以上の個人的な体験もあって本論文では安岡章太郎の『愛玩』を取り上げようと思う。

状況や経緯などが違っても恐らく安岡章太郎は「戦後」つまり日本の敗北の悲

劇によって大きな衝撃を受け、支配階層をはじめ身の周辺のものや親までにある種の不信感を抱きはじめ、そして悲劇の極限に達したところでそれがある種の滑稽さや可笑しさに変わり、自虐的に自嘲的に沢山の作品を書き出すようになったのではないかと思われる。いわば、彼の作品は、自虐的、自嘲的な主人公の立場から、「時代」の不当さを笑いとばす批評をふくんでいる点に特徴があると思われる、そして、このような彼の姿勢は、肉親や家庭生活をモデルにした沢山の自作に一貫してみられるところである。

そして、『愛玩』を取り上げるには、より大きな理由がある。エジプト人やアラブ人は第二次世界大戦やその後の日本の社会や政治の行方に対してすこぶる興味を持っていて知リたがっている。アラブ人日本研究者の第一世代である私と数少ない仲間にもそれに応える義務のような気持ちがある。政治でもなく経済でもなく、文学を専攻する自分としては、その過程を語る日本文学、強いて言えば「戦後文学」と呼び得るものから代表作品を選び、紹介したいと考えている。そのひとつとして『愛玩』を選ぶに至ったわけである。

では『愛玩』という作品は、安岡章太郎が書いた作品、特に「戦争」を伏線的なテーマとしてもつ沢山の作品群の中でどう位置づけられるのだろうか。



## I 安岡文学を形成する大きな要素としての「戦争」

序で述べたように、「戦争」というテーマは安岡章太郎の少年時代及び青年時代そして父親が亡くなるまでの壮年時代を題材にした作品の多くに、背景として取り上げられている。

① 安岡章太郎は幼い頃から軍医を務めていた父の仕事の関係で、軍隊のある町を転々と移っていく。安岡が九才になるまで四年間ほど父親の勤務先である朝鮮に留まり、十一才のとき（つまり一九三一年）父と別れて母親と一緒に東京の赤坂区へ移る。彼は少年時代に六回もの転校体験をした結果、結局学校嫌いになってしまふ。その傾向がずっと尾を引いて入隊するまで続くのであるが、勉強嫌いで学校をさぼっては不良仲間と一緒に色々な冒険をしながら、ところどころ戦争をそれとなく皮肉って言ってみたりする。それは、『宿題』『悪い仲間』『青葉しげれる』『サアカスの馬』『肥った女』『質屋の女房』『蒸し暑い朝』などの沢山の作品に見られる。

つまり、日本は戦争の緊迫した空気にあった最中、軍人であった父の絶え間

ない転勤のおかげで安岡や母は、それに引きずられ振り回された。安岡は生活の安定を失った上、繰り返される転校のことで学校嫌いになり、仲間をつくることもできないので段々閉鎖的になってゆき、逆に母親の存在がその自分の人生の大きな部分を占めるようになっていくわけである。そこからおそらく彼はそのような状況をもたらした軍隊という父の属するものに対して嫌悪感を抱くようになり、従って戦争そのものに対しても反発を感じたのではないかと思う。自分の小学校時代の勉強嫌いな様子を描いた『宿題』などを読んでいくと、軍人である父の「不在」が如何に影響して彼の心の中の孤独を増したことがうかがわれる。ところどころ「戦争」が彼の視界の中に入り込み、皮肉られているのは、以上に述べたような心境によるものではなからうか。

## 2

「戦争」に対する安岡章太郎の複雑な心境を生んだもう一つの原因と思われる要素には入隊経験がある。戦局が日本の不利に動いていくなか、安岡は一九四三年十二月に第一回学徒兵として入隊した。そのころ、日本軍はすでにガダルカナル島を撤退していた。そして翌年の三月に彼は東京第六部隊に現役兵として入営し、ただちに満州第九八一部隊要員として北満孫呉へつれて行かれた。

その年の八月に彼は胸部痲患で入院した。ちょうど入院の翌日、彼が属した同部隊はフィリッピンへ移動したが、レイテ島では全滅してしまった<sup>③</sup>。一見して彼が病氣になったおかげで助かったというふうに見られるであろうが、仲間全員が戦死しながら自分だけ奇跡的に助かったことはとてもショッキングな出来事であり、彼のところに大きな暗いかげを投げ落とした。この点について村松定孝氏は、「(安岡章太郎の) 同世代の多くの若者たちが戦争で散っていったことに対する、つまり死にそこなった悔恨と羞恥がつきまとっている。(中略) どうして不当な戦争で生き残ったことが悔いられたり、恥ずかしかったりするのか。(中略) これは戦中派にしか理解できない、口にしてはならぬ、言葉にできない辛さ」である、と言っている<sup>④</sup>。おそらくそれが戦争が終わってもずっと尾を引いており、安岡章太郎のころの中に戦争のイメージを作り上げるのに大きく影響しただろう。したがって安岡文学においても決して無視のできない跡を残したはずである。

### 3

安岡章太郎は翌年、つまり一九四五年三月に内地送還になる。同年七月に、彼は金沢の陸軍病院で現役免除になったが、その後、東京の家は戦災で焼け、

同年十月（終戦後）に、藤沢市鵠沼に住みはじめる。彼はそのころ脊椎カリエスになるが、医療費不足のため医者にはかからず寝たきりの生活になる。これが『愛玩』の背景をなす。そして体の調子のよいときは進駐軍へ労務者として働きにいく。これが『ハウスガード』『ガラスの靴』などの背景となっている。このように彼がまた脊椎カリエスになって長い間、闘病生活を送ったことがたまたま敗戦の状況と重なった。これもまた「戦争」に対する彼なりのイメージを作り上げるのに大きな要素として働いたであろうし、さらに彼の文学に大きな影響を及ぼしたに違いない。

安岡や同世代の若者がずっと信じきってきた沢山の物事が敗戦によって嘘のように見えてしまったことは、まわりのすべてのもの、そして自分自身に對してまで、ある種の癒しがたい「不審」を抱かせてしまったと思われる。こうして安岡はその後ギブスのコルセットを胸に付け、数年間、動きの不自由な生活を送りながら、敗戦後の混乱した様々な状況をくぐり抜けながら筆を取って作品を書きはじめるわけである。言い換えれば、安岡は背中を患ってほとんど寝たきりの状態になったおかげで、逆にある意味の余裕を持って今までのすべてのことに思いをめぐらすことができるようになり、自伝的なスタイルで自分や

自分の家族をモデルにした作品を書くことが可能になったのである。

4

もう一つ取り上げるべき要素は父親の戦場からの帰還とそれを伴った安岡の複雑な心境なのである。終戦の翌年、つまり一九四六年になると、安岡章太郎の病気が悪化してしまう。同年の五月に、軍医を務めていた父は南方（シンガポール）の捕虜収容所から復員した。しかし父の様子もおかしく、生活能力もなかった。別な言い方で表現すると、「父親にとっての『戦後』とは、敗戦によって生活の手段を失った元職業軍人の生活ということである」<sup>⑤</sup>。但し、父親の生活能力喪失よりもむしろ父親の「不名誉な帰還」の方が安岡章太郎にとって大きな衝撃だったのではないかと思われる。敗戦とともに、安岡氏は母親と二人で、知人の家などを何軒も泊まり歩いて暮らしたり、軍隊で患った病気ではほとんど起きて歩くことさえ出来なかったり、あらゆる物資が不足して、生活の不安は戦時中の何層倍も大きくなった。しかし空襲がなくなり、軍隊もなくなったというだけでも安岡氏は「気が楽になり心がひらいて、何か手枷足枷をはずされたような軽々とした心持になった」<sup>⑥</sup>と書いてもいる。

このときまで安岡章太郎にとっては、本当の戦後の悲劇は実感されていなかった

たとも言えよう。父親の生存が確認され、日本への帰還は時間の問題だと安岡章太郎も母親も安心して安穩な日々を送っていた。父親が帰還したときのことを安岡氏は次のように語っている。

しかし、この異様なほど明るい気分は、ある日、突然、かき消された。父の帰還は戦争が終わったときから当然予期されたことだし、復員局から事前にも報せがあつて、母もそれなりの準備はしていた。しかし、その日、昼すこし前に玄関の戸のあく音がして、そこに階級章を剥ぎとった軍服姿の父が立っているのを見たとき、私は突然、戦後見つけしてきた平和の夢が音もなく消え去るのをハッキリと悟られた。シナ事変以来、十年近く不在だった父は、私たちにとって不意に訪れた客人のような存在だった。(中略)父は明らかに以前の父ではなくなっていたのだ。

以上述べた四つの状況をもとに「戦争」というものに対する安岡章太郎のイメージが作り上げられ、作品中にそれが表現されていくのである。『愛玩』もまた、他の作品と同様に、そのイメージをシンボリックに結晶させて表した作品である。

そして『愛玩』という作品には、上に述べた四つの要素の中で、彼に一番強烈なインパクトを与え、「戦後」のはじまりを形作ったと思われる父親の不名誉な帰還とそのだらしないう無能力、また寝たきりの自分自身のだらしないう無能力が最も強く表されている。

## Ⅱ 「戦後」の意味・「敗戦の後遺症」

ここであらためて安岡章太郎の作品群の中に表された「戦後」の意味を考えてみるなら、それはなによりも「敗戦の後遺症」であろう。そして『愛玩』という作品は、その意味で、安岡章太郎個人にとっての「敗戦の後遺症」であり、また「日本」にとっての「敗戦の後遺症」をたくみに表現していると思われる。それは「愛玩」の対象、つまり「ペットの兎」に象徴されているように思われる。

### ○父親の不名誉帰還と「戦後」のはじまり

まず、父親の不名誉な帰還や彼の生活能力喪失及びある種の発狂をあらわす幾つかの段落を以下に引用する。

軍人だった父は獣医官だったのでどうやら戦犯にもならず、無事に南方から引き上げてまる四年になるのだが、あちらでの占領期間中よほどおどかされたらしく、ぶん殴られることを警戒して、この鵜沼の家の門から外へはほとんど一歩も出たことがない。

また父は戦場生活の影響で自分に必要とするものは何でも宝物にしてしまいくむ。(中略) 欄間や天井や電灯のコードがクモの巣に覆われているのは云うまでもないが、その上に白い細かいカビの花のようなものがまつわりついている。

この鵜沼海岸は波が荒く風が強いことで有名な土地だが、舞い上がる砂煙のなかで「ひえーッ、ひえーッ」というカン高いかけ声とともに、踊り狂う人のようにクワをふるっている父の姿は、やりきれない徒労の孤独と絶望とに僕を追いやる。こんなにして芝をはがしてみても雨が降れば必ず水びたしになって、何もとれない畑にしかならないと云うのに。



そしてまた、となりの部屋からは父と母とのイビキの合唱や、たわけた寝言。  
・父は突如、馬のいなくなような笑い声をあげたかとおもうと、「オキキモ  
モ」と大きな声でさけぶ。これはよくきくと「おチチのむ」と云っている。  
(中略) 最初僕は、戦地からかえってきた父のネゴトを、働きたくないための  
僕らに対する欺瞞の煙幕かと思っていた。だが、滋養のために僕がドライミ  
ルクをのんでいるのを、そばでシンから欲しそうに見つめているところをみ  
ると、そうではないらしい。

などのような段落が認められる。

### ○母親の「発狂」と「戦後」のはじまり

安岡章太郎にとってのもう一つの決定的で悲しい「敗戦の後遺症」は、母親の  
精神的な異常の発生だった。その経過は『愛玩』にはじまり、『海辺の光景』の母  
親のドラマティックな最期でおわる。『宿題』や『悪い仲間』や『青葉しげれる』  
など、つまり「戦中」を時代的な土台にした作品では母親は恐ろしくてしっか  
りしたイメージで登場する。「戦後」まもなくの時代を舞台にした『愛玩』では、そ

れが変わり果てている。一見皮肉で滑稽に描写されているものの、その描写の隙間から安岡章太郎の悲しみや虚しさが感じ取れる。母親のおかしくなった様子を描いたふたつの段落を引用してみよう。

母は、父とちがつて社交的であつたから、こんな時代には大いに活躍するにちがいないと期待されていたのだが、サッカリンの行商をやつて忽ちしくじつてしまった。イカサマ物を近所の人に途方もない値で売つてしまい、それ以来配給当番になつても疑ぐられるしまつである。その結果彼女もまた、おそろしいインフエリオリティ・コンプレックスに陥つて、あらゆることに全く自信を失い、何より困つたことに金銭の勘定がおぼつかなくなつて毎日のちよつとした買物にも、商人に財布をわたしてその中から代金を受けとらせなければならぬ程だ。

人は茶算筒の中からノコギリが出てくるのを見て驚くであらう。これは母が狂つた連想でカッブシ削りとまちがえたためだ。

## ○安岡の病氣悪化と「戦後」のはじまり

一方、「僕」つまり安岡は戦争が終わってから自分の病氣（脊椎カリエス）が悪化してしまい、『愛玩』では上半身をギブスのコルセットに固めて、敗戦の後遺症を背負ってまったく能力を失った存在として描かれている。この三人の「敗戦の後遺症」をこうむった様子をもっとも的確に描いたのは次の段落である。

こんな生活能力を徹底的に欠いた人間ばかりが集まっている一家の混乱は、見た人でなければちよつと想像もつかないほどだ。

ここには正に一家三人の悲劇が浮き彫りにされている。このような一家三人の家へ、途方もない訪問者がやってくる。それは何より父親が連れ込んできたあの二羽の白い兎であった。父の計画は、獣医である自分の本職の技術を發揮し兎を飼つてはその毛を売って一家の経済的ジレンマを挽回しようというのであった。父は「これであと半年もすれば、月々八千円もうかるんだ」と期待をかけたが、母はその父の発言を聞くと、たまげて齒のない口をあけて、まるで幼児が見たこともない大きな砂糖菓子にあたえられた顔をして、嬉しさのあまり笑いが止まら

なかったり、一方「僕」ときたら始めはベットが嫌いで人の肌におしつけてくる獣を愛する人の気さえ分らないが、畳の上にじっととまって眼を赤く光らせている例の兎を見たときたん思わず「可愛いな」と言ってみたりが明るくなったと思ったりして、三人はその訪問者に対して期待や楽しみを抱きはじめるのである。

しかしその家で兎が生活を送り出すと、先ず「僕」とってはその楽しみや明るさの雰囲気はどこかへ飛んでしまい、火に油を注ぐような感じで自分の背中の痛みやかゆさがエスカレートしていくばかりであった。次はこの様子を表す幾つかの条である。

だが、ふと僕は畳の上に黒いコロコロした玉をみつけた。それは点々として部屋中いたるところに撒き散らされている。恥知らず、とはこのことである。う。びよんと一とはねするごとに、ポロリポロリと黒い玉を股の間からおとしながら、二匹そろってテレるでもなく、媚びるでもなく、ウサギはじつにシラジラしさそのものの表情である。馬鹿みたいに赤い眼をポッカリあけたその顔に、僕はわるい予感がした。

ウサギはひる寝て、夜暴れる。ガリガリ檻の木をかじる音や、床板をバタバタふみならす音（中略）、排泄物の流れる音、これらの騒音が闇のなかから不規則に、そして絶え間なくきこえてくるのだ。僕は夜半に、枕もとから駆け込んだ物凄くずう体の大きなネズミに足か頭かを齧られている夢で眼をさます。（中略）こんどは本物の魔物が僕を食いにやってくる。（中略）すると身体につけているかぎりのものが僕をガンジガラメにしはじめる。ギブスをはずしてシャツをめくって、ぼりぼり背中を搔いてみるがムダだ。クスグッタさは奥の方へ逃げ込んでしまう。

騒音にかこまれた暗闇のなかで、不眠のため一層神経質になった僕は、自分の身体が内側と外側と両方からばらばらになって溶けてしまいそうな気がする。（中略）背中のクスグッタさはますますひどくなる。そいつが無秩序な部屋の、ホコリや、ボロ布や、鼻汁だらけでほうり出している紙クズや、そんなものから沼地のメタンガスのようにブクブクわき上がっては、みな僕の身体のなかに這入りこむらしい。

搔けもしない奥の方にあるクスグッタさを我慢するために、僕はただ満身の力をこめて体を硬直させている。

それで、とうとうウサギどもは座敷で僕らと雑居するにちかい状態となってしまった。家全体はまさに家畜小屋だったが……。

・・そのため家中には昆虫類、ナメクジ、ミミズのたぐいがおびただしく棲息することとなった。畳の上のそこにソウスや、みそ汁だらけになった虫が這っている。

これらの条を読むかぎり、いかに「僕」にとってはウサギの存在が大変な迷惑であり自分の病気を悪化させる憎い存在へと変わってしまったことがうかがわれる。

また「僕」から見ると、この憎いウサギのおかげで折角一時期父が一家を救うために見せはじめた頼もしい頑張りぶりが、いつか「僕」をイライラさせるばかりに変わり、父は気がおかしくなったように見えた程である。この様を表す幾つ

かの条を引用しよう。

鼻の穴に白いウサギの毛をからませて、呼吸のたびにそれがヒクヒクゆれているのも知らぬけに、前歯を動かしながらものを食っているときなど、だんだん父の顔からは人間風なところが消えてゆくようだ。

皿にも鍋にも、あらゆる食器という食器には、食い残りの汁や、魚の皮や、茶のカスなどが入っている。父はすべての食べ物の栄養分析表を暗記しているので、頭の中にあるそれらのビタミンや熱量の数字が水といっしよに流れだすのを惜しんで、どうしても食器を洗わせないのである。

おまけに彼はお膳で年中、眼をキョロキョロさせながら僕らが何を食べ残すかを見張っている。

父のモクロミというのは、人間の頭髮のなかにある或る栄養分を抽出して、これをウサギに食べさせることによって、兔毛の成長をうながそうとするこ

とであつた。(中略)ときどき独り言みたいにして、「床屋へ行けば髪はたくさんあるのだからア」といつていた。(中略)夜など僕が寝ていると、どことなく陰險な眼つきになりながらそばへよつてこようとする傾向がある。とうとうある晩、父はたまりかねたように自分の頭をグシグシ搔きながら云つた。「お前の頭、ずいぶん毛があるなア」。思わず僕は両手で頭をおさえた。

またウサギが家に棲息しはじめることによって、母親の関心は全部その訪問者に注がれ、母親の可笑しい行動がエスカレートしていくばかりであつた。母親は主人の発想に同意し、「家」を襲った貧窮という苦しい敗戦の後遺症から立ち直るために、彼女はそのウサギに期待を託すわけである。彼女はその目標を果たすため父と力を合わせて一生懸命に色々な種類の餌を工夫してはウサギにやったりした。しかしその必死な様子は「僕」の眼には、いつしかある種のヒステリックもしくは発狂にさえ映っていた。母親のそういった様子を表す幾つかの段落を引用しよう。

「これであと半年もすれば、月々八千円もうかるんだ」と云つた。それを聞く



と母は「おっと、・・・」とたまげて齒のない口をあけて、まるで幼児が見たことのない大きな砂糖菓子をあたえられたような顔をしていたが、やがて父の「一年の収毛量がいくらで、それによって得られる毛糸が何ポンド、布地が何ヤード、・・・」といった話がはじまると、もう笑いがとまらず・・・」

おまけに彼（父親）はお膳で年中、眼をキョロキョロさせながら僕らが何を食べ残すかを見張っている。・・・このことは年をとって台所仕事をメンドくさがる母の不精をますます助長した。實際母にとってこんなに都合のいい口実はなかった。茶碗や皿は汚れたままほうっておけるし、おかずはマズく味をつけるほどウサギの餌になるものがふえて、よろこばしいというのだから。

母はまた、子ウサギを見たときから、あらたな母性をよみがえらせた。毛のムクムク生えた小さな動物を二六時中抱いて、胸をひつかかれるのもかまわず、ふところへ入れて寝たりする。そして僕が赤ん坊だったころのことを、ウサギに話しかけてもするように、くりかえしくりかえし子供の言葉でつぶやいている。

こうしてみると、ウサギは最初、一家の救世主にすら見え、そこで両親はその救世主に回復の期待をかけ、力を合わせて育てていくという筋がはっきりうかがわれる。通常たかがか弱い、小さい存在だが、こういった危機のときであればこそ期待をかけられ頼られる。敗戦の犠牲になって生活能力を失った家族三人は、もはや資産だけでなく気力や希望さえ失い、敗戦の後遺症に悩み果てていた。皮肉なことに三人は敗戦の後遺症を乗り越えるための気力や希望を、その小さな存在に求めようとするのである。しかし、しばらくすると、それが逆に裏目に出て、「僕」の病気がそのおかげで悪化したり、父もおかしな行動を起こし、途方もない寝言を発したり、母も気が狂ったような態度を見せて前より肥ってしまったりして、あげくの果て父も母もウサギにほとんど顔まで似てきてしまう。そして「家」といえば、ほとんど「無秩序」の状態に変わり果ててしまう。つまり「敗戦の後遺症」がさらに深刻な状態になってしまうのである。

### Ⅲ 「愛玩」・自信と希望の回復

そしていよいよ一家の深刻な状態のクライマックスがやってくる。折角皆がいろいろな犠牲を払ってウサギを繁殖させ、いよいよウサギを売って甘い汁を吸お

うとしたのだが、ところが、こんどはウサギの毛皮が流行らなくなり、仕方なく途方もなく安い値段で仲買人に売らなくてはならなくなってしまう。一家全員の努力は一夜にして水の泡同然に挫折してしまうのである。「戦後」つまり「敗戦の後遺症」を絵に画いたような、なんとも虚しい状態が訪れるのだ。

仲買人が家へやってくると、もはや邪魔で「無用」なウサギに対して「僕」は、「僕にとつては、そんなことはどうでもよかった。いまは何を置いて、この無用の長物を整理してしまう必要がある。うまく料理してくれるなら僕自身が食べたってさしつかえないところだ」と思ったり、一方母親は、

毎日買うオカラのために着物を売ってしまった、とことごとくにグチをこぼしだした。彼女には絶えず、畳の上を這っている獣がモグモグと着物を食っているところが見えるらしかった。以前には、こんなにハッキリとシヨールや手袋を吹き出しているところが見えていたのに。「チュウ、チュウ」という鳴き声に交じって、いまは老婦人のヒステリックな声がしょっちゅうきこえる。まあ、また、こんなところにオシッコをして・

と、一刻も早く、この役立たずの嫌でうるさい小さな生き物を厄介払いにしようと思う。ウサギを買いに来た仲買人もこのウサギたちを見下げて小馬鹿にするばかりであった。彼は、ウサギ一匹を背中の皮のところから摘んで宙につり上げながら言った。

しろうとは、みんなひつかかるですよ、これに。(中略)誰でも最初は馬か牛をほしがるですが、それが買えないのでブタで我慢しようと云うことになる。ここまではまあいいが、これも買えないとなると次がウサギだ。(中略)まあだんなも気を付けなさい。ウサギなら食えもするがモルモットとくると食えないからね。もっとも、このアンゴラでエやつは食ってうまい肉じゃねえが・・

と。しかし背中 of 皮からぶら下げられたウサギは、自分が小馬鹿にされていることが分かったかのように馬鹿力を発揮してもがきだす。ウサギは突然虚空に肢をふんばると、仲買人の腕に噛みついた。これは「僕」をはじめ、父も母もびっくり仰天した。「僕」は思わず「もっと噛め」ところにつぶやく。

この段落には注目すべきだろう。なぜなら、ここは、安岡章太郎の他の作品、

たとえば『サーカスの馬』や『蛾』のいくつかの段落に酷似しているからだ。また『サーカスの馬』<sup>(8)</sup>の場合は次の段落がある。

あの曲がった背骨をガクガクゆすぶりながらやってくる。鞍もつけずに、いまにも針金細工の籠のような胸とお尻とがバラバラにはなれてしまいそうな歩き方だ。・・・しかしどうしたことか彼が場内をひと廻りするうちに、急に楽隊の音が大きく鳴り出した。と、見ているうちに馬はトコトコと走り出した。(中略) おどろいたことに馬はこのサーカス一座の花形だったのだ。人間を乗せると彼は見違えるほどイキイキした。(中略) あまりのことに僕はしばらくアツケにとられていた。けれども、思い違いがハッキリしてくるにつれて僕の気持ちは明るくなった。(中略) 僕はわれにかえって一生懸命手を叩いている自分に気がついた。

また、『蛾』<sup>(8)</sup>では次のような段落がある。

・・春吉氏(医師)がボール紙の筒を私の耳にあて、懐中電灯で誘導すると、

まるで涕をかむより簡単に、長さ二三分の小さな蛾が飛び出したのである。どうせのことにそれがヒラヒラと飛びつづけて窓から天に昇ってくれば、まだよかった。・・・しかし、蛾は急に明るいところへ出たためか、とび出すや否や床の上に落ちた。(中略) そんな話を退屈な思いで聞きながら、ふと足もとを見ると、蛾は灰色の翼を重そうに垂れて、それでも脚をときどきヒクヒク動かししている様子であつた。

以上の二つの段落に、共通するポイントは、これまで弱そうで無力そうかどうか仕様もなく思われた存在が急に逆転し、驚くほどの元気のよさや生命力を発揮するということである。また、そうされることによって語り手は、それまで馬や蛾を見損ねていたことに気づき、その弱そうな存在を見直し、この中で応援し励ますようになる。

『愛玩』の場合も同じことが言えよう。それまでうるさく、無用であり、さらには自分の体に悩みをもたらしさえするウサギが、小馬鹿にされた挙げ句に、急に踏ん張りだして想像を絶するほどの生命力や根性を発揮するのである。『蛾』の語り手が自分の耳の奥に三日以上住み着いた憎い蛾が、出てきたときに蛾のしぶと

さや生命力に対して同情し感動したとき、そして憎たらしいウサギが仲買人の手を噛んだとき、おそらく語り手のころの中では自分自身の姿が馬や蛾や兎の姿と重なり合い、弱者で負け犬で自信喪失のどん底に陥っていた自分にも救いがあるときとり、自信を取り戻して、氣力や希望を回復するのである。結局ウサギは、「敗戦の後遺症」に悩まされ、病氣や不名誉や狂氣そして貧窮の餌食になり、自信喪失をし、生活能力を失った語り手一家に氣力を取り戻させ、希望を回復する大きなエネルギーを与えてくれるのである。

#### IV 日本国民の戦後回復・日本精神發揮への期待

仲買人はウサギに噛まれると、彼は反射的にウサギに自分の怒りをぶつけて「ちくしょう」と叫びながらウサギをふりまわす。そして、その頭を縁側の柱にぶつけてしまう。その瞬間、骨の割れるような物音がした。普通ならそのような小さな生き物はその衝撃でひとたまりもなく死んでしまうのであるが、まもなく、ウサギは何も見えないような赤い眼をまるく開けて「僕」たち三人家族の方を見ていた。ウサギの眼はそのとき、まるで三人に、「おれは死なないぞ、君たちも頑張れ」と訴えたような感じに語り手には映ったのではないか。次の段落では、仲

買人がウサギたちを次つぎに竹籠の中へ詰め込み、自転車に乗って庭の門へ向かっていく。そして最後の段落は次のように書かれている。

籠はふたを閉じた上にホソビキがかけられた。けれども竹の編み目からは白い毛がはみ出して、それ自身生き物のように動いていた。(中略) 不思議にそれだけが、決して腐らず、いつまでも生き残っているウサギ専門の飼料の、ジュットクソウとリュウゼツナとがツルや葉を思いきりのばしている庭の畑の彼方に、門の方へ消えて行く仲買人の自転車を、僕たち三人は、おたがい一言も口をきかずに見送った。

この条からは、次のようなことが読み取られよう。

1 竹籠の編み目から靡くウサギの白い毛は死におもむく、にもかかわらずしぶとく、明るく生き抜く合図であるかのように感じられるだろう。

2 「僕」は、父がおどり狂う人のように鍬をふるって畑を耕し、ウサギたちの餌



になる草を植えようとしていた姿を、はじめは「やりきれない徒勞の孤独と絶望」というふうにししか見ていなかったが、その草だけが「けっして腐らない」と思ったことは、戦場からの不名誉の帰還をした父の「敗戦の後遺症」からの回復への努力が、けっして水の泡のようなものだったわけではなく、明るい未来への希望につながるものに思えたことを示していよう。

つまり、これまで親子三人の間は、長い戦争中やその敗戦後まで互いにいろいろな複雑な感情が入り乱れ、そのせいかな、あきらめや自身喪失や反発などの想いに悩んでいたが、ウサギが三人の生活へ飛び込むことによって三人はそれのおかげでまとまり、家族の絆をしっかりと確かめ合い、そして「敗戦の後遺症」から立ち直る希望や勇氣や根性を持つことになる。

以上が短編小説『愛玩』という全体のモチーフをシンボリックに示す場面である。しかしこの小説にはそれ以外にもシンボリックな記述が幾つか拾える。

ウサギは「チュウ、チュウ」と云って鳴くのである。この鳴き声をきくと僕はなんんだかガッカリする。陛下のお声をはじめてラジオできいたときのよう

な、あの空しさがやってくる・

そして、

あんなに重そうな音をたてて暴れるくせに、何だってあんなタヨリない声で  
鳴くのだろう・

と、「僕」が感じる条である。

私は先ずこの文章を読んで自分の記憶に眠っていたあの三十年ほど前のナセル  
大統領の敗戦・辞任声明が亡霊のように蘇ってきて、安岡章太郎にとっての天皇  
陛下の頼りないお声の弱さと私にとってのナセル大統領のテレビに移る映像の歪  
みが重なり合って一層以上の文章のインパクトが強烈なものとなったわけである。  
ただし、安岡章太郎の「敗戦」の強烈な印象が聴覚的なものであったところに対  
して、私の印象は視覚的なものであったということが言えよう。

ここで安岡章太郎が敢えてこの小説の題に付けた「愛玩」という言葉の意味が  
垣間見えるような気がする。「ウサギ」という小さな生き物が日本国民の「精神」

そのものをシンボリックに描いているようにさえ感じられはしないだろうか。

付け加えて、ここで想像されることは、父親が最初にウサギをわが家へ持ち込んだのは、その毛皮を売って一家の経済ジレンマを乗り越えようと計画したからであり、ウサギはあくまでも「手段」としてしか思っていなかったことである。つまりウサギは「愛玩」の対象つまり「ペット」として飼われる存在ではなかった。それなのになぜ安岡章太郎はこの小説の題に「愛玩」つまり「ペット」という表現を与えたのだろうか。むしろそこに安岡章太郎の意図が隠されているのではなからうか。手段としてではなく、むしろ家族三人の愛情に包まれて大事に育てなければならぬ「ウサギ」とは、何の「シンボル」であろうか。

『海辺の光景』では、父が家の庭で鋤をふるって畑仕事をしたり鶏を飼ったりして家の経済的な危機を乗り越えようと思ったという話は、長々と語られている。しかし『海辺の光景』には、「ウサギ」の記述は出てこない。しかし、『家族団欒図』にはアンゴラの話が出てきており、あるいは父親は実際に兎を飼ったことがあったかもしれない。では、一体なぜ安岡章太郎は『愛玩』で「鶏」ではなく「ウサギ」こそにこだわる必要があったのだろうか。また「アンゴラ」であれば様々な種類の様々な色があるはずだが、特に「白い」ウサギにこだわる必要があった

のか。

小説のはじめの部分と終わりに近い部分に「ウサギ」の描写が表れる。まずはじめの部分では、

しかしその家でウサギが生活を送り出すと、まず僕にとってはその楽しみや明るさの雰囲気はどこかへとんでしまい、火に油を注ぐような感じて自分の背中に痛みやかゆさがエスカレートしていくばかりであった。(中略) ばかみたい・に・赤い・眼・を・ポッカリ・あけた・その・顔に、僕は悪い予感がした・。

そして、終わりに近い文章は次のように書かれている。

仲買人はウサギをふりまわすと頭を縁側の柱にぶつけた。(中略) ウサギはそれでも死んだのではなかった。何も見えないような赤い眼を、まるく開けてばくらの方を見ていた。

この両場面におけるウサギの眼の表情が対照的で一八〇度違って書かれている。

ばかみたいに赤い眼をぼっかり開けたその頼り無い顔から、見くびっていたその小さな生き物の眼が今度は真っ赤に燃えて真剣にみつめる顔に変わっている。シロイ兔にアカイ眼、この取り合わせは「日の丸」を思わせるではないか。そして、この眼の描写は小説の内容から行っても「哀願」ともとれる。そのようにいくつかの意味が重ねられたシンボルとして、ウサギの赤い眼を読むことができるのではないか。

もしかしたら、主人公の「僕」を含め家族三人、つまり日本国民が「ウサギの大切な愛らしいその赤い眼」、つまり「赤い日の丸」に自分たちの切実な願いを託し、たとえ小さくか弱くとも、それを信じて一刻も早く自分たちを敗戦の後遺症から立ち直り、明るい未来に向かうことを約束するものとして、この白いウサギは書かれているのではないか。つまり、この「ウサギ」という小さな生き物が、それ自体が日本国民の「精神」のシンボルである「日の丸」を象徴するかのよう

に感じられるのである。

安岡章太郎は戦争のことを皮肉り、いろいろと滑稽に取り上げて書いてはいるが、戦争中から大日本帝国の指導部の姿勢や戦争そのものに対して皮肉で滑稽な想いを抱いていたとは限らないのではなからうか。彼が天皇をはじめ軍部や古来

の日本を支えてきた「精神」、そして自分自身の「自信」に対して彼はある種の癒しがたい「不審」を抱いたのは、敗戦をきっかけとしてであり、そしてそれが「敗戦の後遺症」という形に変わっていったのではないだろうか。彼が腰に付けたあのコルセットの中で何年も背中をかくく蝕んだあの「虫」が、彼の中にある文学才能をくすぐり刺激を与え、そして、それ以後小説が書きはじめられたのではないだろうか。

『愛玩』における家族はまるで「日本国民」を象徴したもので、そしてその家の「無秩序」は、敗戦後日本を取り巻いた無秩序状態もしくは日本国民の精神的な迷いや乱れを象徴し、その混沌の中へ引き入れられる「ウサギ」に、本来あるべき日本人の精神力が託されていると読むことができるだろう。とすれば、「家」に踏み込んだ仲買人は、「進駐軍」に見立てることができるかもしれない。確かにウサギが「家」に住み込みはじめたとき一家三人に大きな迷惑をかけ混乱を引き起こしただろうが、最後に同じウサギのおかげで一家三人は一体となり、無秩序の状態になった「家」の秩序回復に向けて立ち直る。これは「日の丸」、つまり日本精神を強調したあげくに敗戦の悲劇を味わわねばならなかった日本国民が、それでも「日の丸」を信じ、そのもとで団結し、敗戦の後遺症を挽回しようとする意味

にも通じるのではないか。換言すれば、「愛玩」は日本国民に戦後からの早期回復、つまり「敗戦の後遺症」からの立ち直りを促し希望を与えるものへと、その位置転換をしているのではないか。この点に作品『愛玩』の神髄があるのではないかと私は考えるのである。

### むすび

「戦争」というテーマは安岡章太郎の少年時代及び成年時代そして父親がなくなるまでの壮年時代を題材にした作品の多くに、背景として取り上げられている。その中から、この論文では『愛玩』（一九五二年発表）を取り上げ、安岡章太郎はいかにこの作品を以てシンボリックに自分の中の「戦後」を表現したのか、という点を探ろうとする。

そこで先ず、安岡章太郎のころの中に「戦争」のイメージを作り上げたかどうかと思われる幾つかの要素が取り上げられる。

① 少年時代から、軍人だった父親の仕事の都合のせいで転校生の生活を数回も強いられ、結果的に学校嫌い・勉強嫌いになり自分の世界に閉じこもってしま

うわけだ。これで彼は軍及び戦争に対して自分なりのイメージが出来てしまったのではないか。

② 太平洋戦争の終わりに入隊をしたときの嫌な思い出。

③ 敗戦の時期を伴った安岡章太郎の発病（脊椎カリエス）及びその長い闘病生活。

④ 敗戦後の安岡章太郎家族三人による生活無能力の情けなさ。

⑤ 両親の夫婦関係悪化。

⑥ 戦場からの父親の不名誉な帰還。

⑦ 母親の発狂。

以上の七点の中から、この論文では、特に三点目から七点目まで取り上げてみた。これは『愛玩』から幾つかの引用と照らし合わせながら考えてみた。また、以上の七つの要素をもとに、安岡章太郎の胸の中にある種の「敗戦の後遺症」と呼び得るものができたのではないかと考えた。

結論とするところは、愛玩つまりウサギは日本国民の「精神」をシンボリックに描いていて、安岡章太郎一家三人、つまり日本国民に敗戦の後遺症の早期回復の希望を促すものではないかというのが一つの点である。もう一つの点は、いわ



ばこの作品でもしウサギが日本精神を表すものなら、これはまた「日の丸」のシンボルではないだろうかという点である。ウサギの白い毛や赤い眼が大事なキーワードではないかと思われる。

### 【参考文献】

- (1) 論文「安岡章太郎文学における実父「章」の人物像と安岡の戦争観との関係・『宿題』の場合」・カイロ大学日本語・日本文学科紀要「日本・ことばと文化」・第2号・一九九七年発行
- (2) 論文「肥った女」・戦時下を生きる都会の若者たち」・「中京国文」・一九九八年三月発行
- (3) 「鑑賞日本文学」28・安岡章太郎・吉行淳之介・角川書店
- (4) 「安岡章太郎の戦争体験」・村松定孝・國文学「解釈と鑑賞」一九九二年二月号
- (5) エッセイ「父の酒」・「安岡章太郎随筆集」8・岩波書店・一九九二年十二月発行
- (6) 同上
- (7) 「海辺の光景」・安岡章太郎・新潮社（新潮文庫）・一九九〇年四月発行
- (8) 「質屋の女房」〔「家族団欒図」〕・新潮社（新潮文庫）・一九九二年七月発行

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

安岡章太郎文学との出会いは今から四年ほど前のことであった。そのとき、カイロ大学日本語学科の図書室の片隅で『愛玩』を一通り読んだことを、昨日のようによく覚えている。ときどきアラビア語で短編小説を書いたりする自分は久しぶりに感動し、安岡章太郎がこの小説で訴えようとしていることが強く自分のところを打った。この作品もまた、中東戦争を少年時代に体験しエジプトの敗戦を目の当たりにした私のところに眠っていた数々の思い出を叩きおこしてしまったのである。その日から同作家の作品を次々読んでいくにつれて、安岡章太郎をただ「私小説家」として片づけてしまうことが大きな過ちであることを認識した。そしてこの認識の上で、微力ながら、これからこの偉大な作家の作品をできるかぎり丁寧に一つずつ分析し、彼がまだ生きている間に、彼の声をもう一度日本人に届けようと思いました。安岡章太郎は忘れかけられている存在のようだが、残り数少ない戦後派の一人としてとても貴重な存在で、記憶も確かで、元気に東京の尾山台のこじんまりとした自分の家に、戦中・戦後時代当時の証言者として生きている。

أحمد محمد فتحي مصطفى

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都ーケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」



⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐる－」
⑤⑤	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6.1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6.2.8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6.3.8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6.4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6.5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6.6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験 -文学における日本人と上海」
66	6.7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見 -王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを 中心に－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのか かわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧①	7.12.19 (1995)	タチャーナ L. ソコロワ＝デリュシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 ― 解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 ― なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界―三井高房『町人考見録』を中心に―」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学ー近代からの再生ー」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 『『菊と刀』のうら話』
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 『『日本文学』とは何かー21世紀に向かって』
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア モネ Livia MONNET (スイス・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール モスク Carl MOSK (アメリカ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人ー外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼までー狂言役者の修行」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者ー一休宗純とその文学」

105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才ー語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間にー金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ー 詩的イメージとしての典故 ー」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・ 日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪1	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』ー安岡章太郎の『戦後』のはじまり」



⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 『『道行き』と日本文化 - 芸能を中心に』
113	10.12. 8 (1998)	グレン フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 『『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」

○は報告書既刊

\*\*\*\*\*

発行日 1999年3月15日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

Homepage Address: <http://www.nichibun.ac.jp/>

問合せ先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

© 1999 国際日本文化研究センター



■ 日時

1998年10月 6 日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

